

H・ブロッホ『夢遊の人々』における「ハンナの物語」

中 村 善 一

長編小説『夢遊の人々』(*Die Schlafwandler*)の第三部「ユグノオまたは即物主義」のテーマは、「価値の崩壊」である。このテーマを巡ってまず、ロマーン(Roman)のなかに直接的に「価値の崩壊」と名づけられた論理的文章が投入される。その他に、この第三部の中心的物語としてのユグノオの物語があるが、それとはまた別に、いくつかのいわゆる平行的物語が書き込まれている。それらは、たとえば「ベルリンの救世軍の少女の物語」であり、ハンナ・ヴェントリングについての物語であり、ゲーディッケと呼ばれる兵士についての挿話等である。一つのテーマを、作者ブロッホは、さまざまな方法で異った角度から執拗に追求して行く。いろいろの表現手段が、ロマーンと名づけられた形式に統合されている。ブロッホは、人間についての出来事であるのなら、言葉を尽してとことん論議をつきつめて行けば、必ずや確かな実体にまで行き着くのだ、と信じているらしい。このような大部の、いうならば饒舌体小説の存在価値に対する作者の信頼はもう、信仰に近いとも言える。ブロッホは、言葉そのものの多様で多量の積み重ねに、何ものにもかえられない絶対的な信頼を置いている。

この小論では、ハンナ・ヴェントリングについての物語(以下「ハンナの物語」と記す)を選んで、この物語が長編小説の一構成要素であると同時に、独立的なノヴェレ(Novelle)としての性格を合せ持つことを確認する。次に「価値」を措定する自我の働きを検討し、最後に「価値の崩壊」

というテーマの変形としての「孤独」の問題を追求したい。

1. 成立とその輪郭

第三部の全体は88章から成り立っているが、「ハンナの物語」はそのうちの9章を占めている。それは、8, 13, 17, 25, 38, 51, 64, 71, 78の各章である。この9章の他にも、60, 65それに85の三つの章においても、「ハンナの物語」が一部取り入れられている。繰り返すことになるが、「ハンナの物語」は、第三部において「平行的物語」の一つとして語られる。つまりメインストーリーとしてのユグノオの物語や、学術論文スタイルの「価値の崩壊」の他にいくつか取り入れられている平行的物語のうちの一つである。この「ハンナの物語」が最終的に現在のような形に定着したのは、パウル・ミヒャエル・リュッツェラーの指摘¹⁾によれば、1931年の中頃である（第三部の発表は1932年）。

そもそもこの長編小説の第三部だけに限定しても、その成立にはさまざまな曲折があり、その結果として多数の草稿が存在している。それは、加筆と訂正と改編を倦むことなく繰り返す作者ブロッホの執念の結果である。元来この第三部は、長編小説『夢遊の人々』とは全く別に、ノヴェレとして独立的に存在していたものである。リュッツェラーによれば、ノヴェレとしての原稿はすでに1928年8月16日以前に成立していた。このノヴェレ原稿が、後にロマンに改作されることになるが、当時のノヴェレ稿は、「ユグノオ von H. J. B.」とタイトルをつけられて、アメリカのイエール大学図書館に保存されている。もちろんノヴェレ原稿そのものは長い間未刊行のままであったが、最近完結したSuhrkamp版のブロッホ全集第6巻（1980年）において、これが「ユグノオ」と題して収録され、初めて印刷された。

イエール大学図書館には、他にロマンとしての第一稿、第二稿、第三稿が存在している。第一稿は、1929年の成立で、この原稿の写しが、1929

年の終りか1930年の始めに、Diederichs社、S. Fischer社、Kiepenheuer社それにRhein-Verlagに送られた。つまり出版交渉が行なわれた。そして第二稿は、1930年8月から翌年1月の間に成立する。第一稿が大幅に改作・拡大されて、第一稿の151ページが483ページにふくらんでいる。前述のように、「ハンナの物語」その他のさまざまな平行的物語が第三部に導入されるのはこの時期である。この第二稿がさらに、比較的小さな部分に関してではあるが無数に訂正されて、第三稿に改編される。²⁾

第三部の決定稿における主要登場人物の一人ハンナ・ヴェントリングは、「取るにたらない田舎弁護士の取るにたらない妻」³⁾である。時代は第一次世界大戦の終り頃。夫は軍務に就いているので、女主人公は、10才ぐらいと思われる息子と使用人たちとともに、田舎町のそのまた郊外にある広い庭つきの屋敷に住んでいる。夫は長く不在であり、住む家が淋しい所に立地しているという状況もあいまって、彼女は現代人の宿命的特徴である「孤独」に悩んでいる。自分の内面にのみ目を向ける性格の女性で、自分の子供との接触さえ失いかけている。物憂く怠惰で平凡な日常生活にしかし、ある時一つの変化が起るかのように見える。それは夫のハインリヒの一時的帰郷によるものである。世間から引っ込んで暮らしていて、外界とのコンタクトを極端に制限していたハンナの孤独で気ままな日常が、夫の帰郷によって転機を迎えるかに見える。夫もしかしてハンナの孤独を癒すものではない。夫が目の前に居ても二人は疎遠であり、夫は一時的なセックスパートナーになり下ってしまっている。夫と認識を共有することはないし、夫が存在の確かさを発見するための契機になるわけでもない。「価値の崩壊」は、ハンナ個人の内部においても極度に進行してしまっている。ハンナの孤独な生活のなかで養われた考え方は、もはや日常生活を正常に続けて行くことが出来ないほどに、内部崩壊してしまっている。「孤独」とそれが生み出す結果は、彼女にとってもはや生き方に矛盾を持たらすものでもなく、またそれに反抗せざるを得ない対象でもない。それ以外にはあ

り得ないものとして、不可避的に受け入れられて行く。夫のハインリヒが、「熱い (heiß)」とか「赤い (rot)」⁴⁾という言葉の表現するものに特徴づけられる存在であるとすれば、妻のハンナの場合は、「河 (Strom)」や「川 (Fluß)」あるいは「通過 (Durchgang)」⁵⁾などの流れ去って行くものを表現する語群に象徴される。ハンナは現実的なものとの因縁の薄い存在である。すべては彼女の傍を通りすぎ、通過して行ってしまう。ハンナの実存的な不安は、さまざまな形を取る。夜になると不安になり、幻覚を見る。第三部の85章（ハンナの登場する最後の所）に到ってハンナは半催眠状態のなかで、「声」を聞く。「声」にうながされて彼女はドアの外に出る。「彼女がドアから外に出たとき、そこに彼女もまた見たのである。目標が見えたのである！ ずい分長い敷石道のむこうに、このずい分と長い橋のむこうに、そこに庭の垣根をなかば乗越えて、闖入者が、男が橋の欄干の上によじ登っていた。……両手を前にさしのべて彼女はこの橋を渡って行く。」⁶⁾

この引用部分はシュミット-ボルテンシュラーガーによれば、⁷⁾ハンナの救済の可能性を暗示するきわめて重要な箇所である。橋 (Brücke) という言葉が三回も、繰り返して強調されている。それも、庭内の道を橋と呼ぶことは、かなり不自然であるのにあえて「橋」と名づけている。「橋」は、この作品におけるブロッホの用語のなかでも再三再四使用される重要語句のうちの一つである。⁸⁾ハンナ・ヴェントリングという形姿は、現代人の精神的状況の典型としてブロッホが造形したものであり、その典型的人物の特徴は、救いようのない孤独、ブロッホの言葉そのもので言えば、「架橋不能の (brückenlos)」⁹⁾孤独である。「価値崩壊」の時代に生きる現代人に必要なのは「橋」である。「橋」が孤独の状況下で同胞への到達を可能にする。ハンナには、最後の85章に到ってようやく、つまり死の直前になってやっと、「橋」が見えるように思えた。ハンナは実際に自分の孤独を克服したわけではないが、彼女はその目標地点を見通すことができたのである。

「声」の呼びかけを聞き、「新しいゲマインシャフトへ到る道」¹⁰⁾を見つけたような気になったのである。

2. ノヴェレとしての「ハンナの物語」

『夢遊の人々』の第一部、第二部そして第三部を通じて、終始「孤独(Einsamkeit)」は重要なテーマの一つである。しかし特に第三部では、「孤独」が中心テーマとなる。作者自身が出版社主の妻にあてた手紙のなかで次のように言っている。「この本は、いくつかの物語の組み合わせから成り立っていますが、それらの物語はすべて、同じテーマを少しずつ変更したものです。つまり孤独へと人間を差し戻してしまうのです。……孤独のなかから生まれ出てくる新しい創造的な力を確認したいと思っているのです。」¹¹⁾

そして第三部のいろいろの物語のなかでも、特に直接的に「孤独」の問題と取り組んでいるのが「ハンナの物語」である。「ハンナの物語」は、第三部のごく一部分を占めるにすぎないものであるから、第三部の全体の枠のなかで第三部を構成する一つの要素として解釈されるべきである。しかしまた同時に、この部分だけを独立的ノヴェレとして、ロマーンの枠から取り出して考察してみるのも有益である。複雑なからみ合いを離れて、そのもの自体を根本的に分析し、検討できるからである。もちろん第三部の内容としての個々の構成要素は、互いに先行するものとの関連を持ちながら、後続する他の要素を先導する。たとえば「価値の崩壊(一)」(12章)は、その直後にくるハンナの物語(13章)と密接に関係しているし、「価値の崩壊(三)」(24章)は、25章のハンナの物語と有機的連関を持っている。それはいうならば、一方が理論で、他方がその応用ないしは実際の展開という関係になっている。だから、「この本のあらゆる糸は、もう一度取り上げられて最後の結び目にむすび合わされる。」¹²⁾

ブロッホによれば、ロマンは「時代を表現」¹³⁾するものでなければならないが、ノヴェレは、「ある特定の体験状況の全体性」¹⁴⁾を表現すべきである。「ハンナの物語」そのものは、独立的に見ればノヴェレと考えられるから、ハンナの体験状況の全体性を叙述すべきである。それはとりもなおさずハンナの孤独の経験のすべてを可能な限り全体的に表現することである。繰り返して言えば、ノヴェレは、いわゆる「時代」の全体を総合的に表現すること（ロマンの課題）はできないが、その時代に生きる特定の人物の特定の状況下における「内的体験」の全体を叙述すること、に適している。そしてノヴェレは、そのために三つの領域を描写すべきである。その三つの領域とは、「第一に、無意識の面としての外的事象の叙述、第二に心理学的局面、すなわち登場人物の思考内容の叙述、そして第三に、作者の本来の使命である認識論的平面……、いわば注釈者の立場からの叙述である」¹⁵⁾である。」

ここにまとめられている叙述対象としての「三つの領域」は、「ハンナの物語」においても、その基本的な枠組みとなっている。たとえば、「無意識の面としての外的事象の叙述」を、「ハンナの物語」の始まりの部分を実例として見てみよう。それはハンナのある朝の情景である。彼女は朝目覚めても、可能なかぎり日常的なるものの避けがたさを、あえて回避しようとする。「もう一つ別の新しい夢」¹⁶⁾に逃げ込んでしまう。昼日中でさえいつもこのように、モウロウとした状態のなかに浸り込んでいる。それが彼女の目下の人生の基本的気分¹⁷⁾に合致している。彼女の生活や存在は、ほとんど世間と結び付いていないし、彼女もまたそれを望んではいない。ハンナは自我には病的に執着するが、外界からは孤立している。日常生活は夢想的で、思考とは無縁である。だから実際にはむしろ、「ハンナの夢は彼女の覚醒時よりももっと具象性を持ちもっと血が通ったもの」¹⁷⁾である。彼女にはもはや夢のほうがより現実的な程に、日常が夢想的である。彼女は、現実と関係を持つと頭痛がする。彼女の思考のプロセスは、脈絡がな

く、連想ゲーム的である。このようなハンナという人物の特殊性、つまり孤立性が、この場合の「無意識の面としての外的事象」となっている。ノヴェレの主人公ハンナ・ヴェントリングという人物はどこで、どういう人物であるのかという説明については、最初作者は全く触れようともしない。最初の章（第8章）の一番最後のごく短い、たった三行の段落においてようやく、ハンナがハインリヒという弁護士の妻であり、フランクフルトの生まれで、夫は目下軍務で不在であることが示される。この三行だけで独立した短い段落は、まさに世俗的事実の説明など、このノヴェレにとってはどうしても良いことなのだとわんばかりの扱い方である。重要なのは、ハンナが現実の世界では全く疎外されてしまっているという事実である。

以上は冒頭部分についてのみの考察であるが、「無意識の面としての外的事象の叙述」は、それだけで、そしてまたその他の二つ（登場人物の思考内容の叙述・認識論的平面からの叙述）とからみ合わされて、「ハンナの物語」の随所に見い出すことができる。

第二のレベル、「心理学的局面すなわち登場人物の思考内容の叙述」について確認しておこう。

ハンナの思考のプロセスとその内容は、たいていの場合心理学的側面から追求され、把握される。つまり精神分析学的な手法が適用されている。作者ブロッホがこのような心理学的方法を使用することは驚くにあたらない。彼は大学時代から長年にわたって心理学の研究を続けているし、1943年にはロックフェラー財団から群衆（集団）心理学研究のための研究助成金を得ている。ブロッホの心理学についての研究論文は、Rhein版の全集ではその9巻にMassenpsychologie（1959）として、Suhrkamp版では12巻にMassenwahntheorie（1979）として収められている。ブロッホの精神分析学とのきわめて密接な関係が、ハンナの「思考内容の叙述」に際して大いに利用されている。すなわち、「内的モノローグの形式」の活用であり、また「精神分析治療に使用される自由連想方法」¹⁸⁾の応用である。精神

分析学的手法を利用することによってノヴェレに純粹に学問的論述を導入し、科学的なるものを文芸作品のなかに統合しようとする。またハンナという具体的人物の内部において徐々に形成されて行きつつある認識のプロセスが心理学的に説明され、それがそのままノヴェレの一部となる。すなわち、ハンナは夫との精神的対決によって、その意識の内部にさまざまな反応を見せる。そこに見られるいろいろな小さな出来事が、次々と自由な観念連合を生み出して、増殖する。同時にハンナの観念の増殖は、精神分析的方法を援用して分析され確認される。読者もまた、この方法によって、ハンナの内省的な意識の形成プロセス（つまり自我の孤独化のプロセス）を追体験できる。

ハンナは、自分の生き方が日に日に現実性を失って行くことを意識している。それは、自分の日々の生き方が夫の不在もあって、「独身女性的存在」¹⁹⁾であることにその原因がある、と思われる。戦争を原因とする家庭内の欠損は、夫に対する不満となって現われる。あらゆることの責任と罪は夫ハインリヒに転嫁されてしまう。自分の付き合い嫌いの性格もさらには積極性の無いこともすべて夫が悪いのである。ハンナは一人きりで「内的モノローグ」を繰り返し、一種の思い込みのかたまりが形成され、さらにそれが観念連合を生んで次々と増殖する。彼女は心理学的に言えば、「疎外という奇妙な状態」²⁰⁾のなかにいる。ピアノを弾いている自分の手がどうしても他人の手であるかのように感じられる。疎外の状況がかなりひどく進んだ状態であることが、鏡を覗き込んで自分の顔を捜すという行為で表現されている。²¹⁾夫が休暇で帰郷しても事情は変わらない。帰郷の知らせは彼女にアンビヴァレントな反応をもたらす。希望と恐れとを同時に感じる。夫の帰郷が、「やはり深い暗黒からの救いのようなもの」²²⁾であり、「ハインリヒの帰宅とともに自然な秩序がまた回復するだろう」²³⁾と期待する。しかしまた他方で、「そのような秩序などはもう二度と得られないだろう」²⁴⁾という気がするし、「暗い森」に「黒い雲」がかかって来るよ

うに、ハンナの心のなかは不安で一杯になる。夫がそばに居ても居なくても、ハンナの感情のなかにある不安には変わりがない。そもそも「シンリーへの新婚旅行のときのある雨の日の夕方海辺に立った時」²⁵⁾からのずっと消えることのない「不安」である。ハンナとハインリヒの二人には、真の人間関係などはもともと生じたことが一度も無かったのである。夫は、「自分のかたわらに立っていた見知らぬ男」²⁶⁾にすぎない。ハンナの不安は、存在論的な不安とでも言うべきものであるが、しかし心の底では「汚れのない涼やかな世界に心安らかに抱き入れられて」²⁷⁾いたいという願望を持っている。

ノヴェレとして重要なのはしかし、ハンナのかかえている個人的な問題を、心理学的に検討することではない。ハンナの個人的特殊状況が、その個別性を超えて、現代人の普遍的典型へと昇華させられなければならない。ドイツの田舎の平凡な一人の人妻の実例が、「時代精神」を体現するものに高められる。彼女は時代の特徴のすべてを身につけた典型的な人物であり、彼女の行動は「時代精神」に支配されている、と見なされる。ハンナは「時代精神」の生み出した一典型となるやいなや、「時代精神」がまたハンナの行動図式を左右するものとなる。ハンナの生き方は、「あらゆる個人の運命と同じように、世界をおおっている形而上の支配を反映している」²⁸⁾のであり、結局のところ「自我の孤独」という悲劇性をその最大の特徴としている。

最後にノヴェレの第三の側面、すなわち「認識論的平面……，注釈者の立場からの叙述」を見ておこう。

第三部のロマーンが、「価値の崩壊」と題する認識論的注釈を重要な構成要素の一つとしているのと同様に²⁹⁾、ノヴェレとしての「ハンナの物語」もまた、その内部に一定の認識論的叙述を持つことによって、ロマーンと同じ構成原理に拠ろうとしている。ハンナという具体的人物をめぐる外的事象を記述して、またその人物の心理的側面からその思考内容を描いて例

示的性格を明示するという図式はすでに上に述べた。それに加えてさらに第三の段階として、作者は理論的注釈を付け加えようとする。ブロッホはつねに頭の中に、「心理学的動機づけの背後において、認識論的な基本的立場と真の価値論へと立ち戻ろう」³⁰⁾とする方向づけを持っている。ノヴェレとしての作品においてもまた、つねにその哲学的な位置づけが追求されてしまう。結果的にはしかし、この種の認識論的な論述部分が、「ハンナの物語」を正確に読むための、そしてその物語の全体的構造を理解するための、「理性的かつ知性的なカギ」³¹⁾の役割を果たしてくれている。

注釈者としての作者が、その「認識論的な基本的立場」として、「ハンナの物語」の結末で表明するのは、「自然な秩序」³²⁾への憧憬である。ハンナが現世における人生で「絶対的なもの」の存在を確認し得る場所が「自然な秩序」の支配するところである。そこは、「孤独」や「死」などの問題を止揚し得る価値測定が可能になる世界である。「その憧憬は女の憧れを思い起こさせる。見たところ愛する男性に向けられているように見えるが、ほんとうはしかし自分を暗闇のなかから連れ出して行ってくれるあの聖約の国に向けられた憧れを思い起こさせる。」³³⁾ハンナの憧憬は、夫のハインリヒに向けられたものではなく、「暗闇のなかから連れ出してくれる」ものへの憧れであり、「自然な秩序」が再構築されることへの憧れである。「自然な秩序」の支配している世界は、ハンナの孤独を根本的に癒すことのできる「絶対的なもの」を生み出す「場」である。この「場」は、『芸術の世界体系における悪 (Das Böse im Wertsystem der Kunst)』(1933)という論文における場合は、「中世のキリスト教的プラトンの世界像」³⁴⁾と呼ばれている。ハンナの生きている時代はしかし、「神に始まって、神に終り、神のなかを漂う」³⁵⁾というような時代ではない。ハンナは世界の秩序を願い、秩序の世界に憧れてはいても、自然的な全き秩序のなかで生きたことは一度もない。彼女の知っている秩序は、せいぜい部分的な秩序の世界にすぎない。ハンナの現在の生活のなかにも部分的な秩序ならば無いこ

とはない。部分的秩序はしかし、「自然な秩序」とは違って、ある一定領域にのみ妥当するものであるから、他の別の部分的秩序と併存していて、他の秩序と矛盾したり、衝突したりするのが普通である。たとえば結婚生活も一つの部分的秩序である。結婚生活によって、それなりの保護と安定性が保障されて、人は一種の社会組織に属するものと見なされる。ハンナもこの秩序に属していた。「もしも当時家が建てられるという見通しが無かったら、ハンナ・ヴェントリングはおそらくあんな若い田舎弁護士に惚れ込んだりしなかったに違いない。しかし1910年には上流階級の若い女の子たちは『スタジオ』、『室内装飾』それに『ドイツ美術と装飾』などの雑誌を読み、『イギリスの古様式家具』なる本を持ち、結婚についての彼女らの性的観念は、建築学上の諸問題ときわめて密接に結びついていた。ヴェントリング家の住宅そのものにしても、あるいは住宅の切妻の壁にバロック風の文字で『バラの家』と書かれていたのも、控目ながら当時の流行に合わせたものであった。」³⁶⁾「バラの家」と名づけられた新婚夫婦のための新居は、愛情と豊かさのシンボルであり、また同時に「秩序」のシンボルでもあった。家の内部に家具を配置して、あちこちに装飾を施すこともまた建築学的に均衡を確立することであって、そこに調和や対位法によるそれなりの秩序が生み出される。「バラの家」のもたらすものはしかし、「秩序」のコピーにすぎないのであり、この家の作り出す調和は恒久的なものにはなり得ない。ハンナとハインリヒの結婚生活も、「バラの家」も、一時期一領域だけをカヴァーする部分的価値領域である。時間が経てばその内容の失われてしまう「古いロマン的諸形式」³⁷⁾である。それはハンナが自分自身を一時的にそこに従属させている間だけ、実存的不安感を解消してくれる。深い虚無を完全に払拭するものではないし、深刻な自己喪失を根底から埋め合わせてくれるものでもない。部分的秩序は、一定時間が経過すれば必ず破綻する。ハンナに残されているのは、すべてを全的に解決する「自然な秩序」への憧憬だけである。

3. 「自律的自我」とその機能

物語の主人公ハンナは、視点を変えて見れば、作者ブロッホがその思考実験のために小説というフィールドに作り上げた「自我の価値モデル³⁸⁾ (das Wert-Modell des Ich)」の一つである。時代の典型的人物を実例として前面に出し、その人物をめぐる状況を設定しその思考のプロセスを突き詰めて行くために、「自我の価値モデル」が作り出される。この「モデル」は、人間と世界の関係、人間と人間の関係等を検証する。仮に「ハンナ」と名付けられた「自我モデル」は、いわば「価値」を措定するための中枢機能を持つ主体として実験世界に送り出される。この時「自我の価値モデル」や「自我モデル (Ich-Modell)」という言葉とともにブロッホが頻繁に使用する術語が「自律的自我 (das autonome Ich)」である。これらの言葉は、それぞれ厳密に定義された上で使用されているものではない。³⁹⁾ 三つの術語の間にはそれほど大きな違いはないと思われるが、「自我」の持つ機能としての「価値措定」の働きに視点を置いたとき、「自律的自我」という用語が好んで使われるようである。

ともあれハンナの生き方の追跡が、つまりは「自律的自我」の機能についての研究が、自我の孤独やひいては神の存在についての思索につながってくる。神もしくは絶対的価値に対して、ハンナが理念的にも実存的にも到達不可能であるとすれば、そこに彼女の「孤独」の問題の解決はない。大いなる価値との関係性の欠落は、人間相互の連帯とコミュニケーションを不可能にしてしまうからである。ハンナの内部の自律的自我が永遠に神や価値を認知し得ないのであれば、そこに生まれるのは孤独のもたらす実存的な諸問題だけである。それらの問題のなかでも究極のものは「死」である。「死に対する不安」が「自律的自我」に対して価値の創造を要求する。逆に言えば、自我の価値を措定する行為だけが、死の問題を止揚する。「死」という絶対性に、「自律的自我」が介入することによって、そこに価

値の絶対性を呼び出す可能性が開ける。「価値と呼ばれているもの、また価値と呼ばれるに価するものはすべて、死の克服と止揚を目標にしている。⁴⁰⁾」もちろん「死」の克服は、つねにシンボリックな解決にすぎない。時代や地域を超越して変動することのない価値を獲得するために、「自律的自我」は不断に新しいシンボリックな価値創造を続ける。これがつまり自我の拡大と言える。

そして「自我」が「価値」を創造するとき、そこに働く基本的原理が「ロゴス」である。ブロッホの言うロゴスを定義するのは困難であるが、それはあらゆる人間的なものに妥当する論理的構造の基になるもの、である。ロゴスには「根源的先験性」があり、論理的認識はロゴスに従属している。⁴¹⁾ ロゴスそのものに対しては、直観的にのみ接近し得るものであって、その合理的解明は不可能である。さらにロゴスは創造的原理を内蔵していて、「あらゆる事象の始まり」⁴²⁾ となり「あらゆる言語の源泉であり同時に目標」⁴³⁾ でもある。人間と世界との関係性の認識はロゴスに媒介されるのであり、「自律的自我」もまたロゴスというカテゴリーのなかから生み出されたものである。従って「自律的自我」の働きである「措定」や「措定の措定」は、その根源においてロゴスに拘束されている。「自我」の価値を措定する行為はそれ故に恣意的なものではない。「自律的自我」が、「人間と人間を折り合わせ、孤独と孤独を調停する」⁴⁴⁾ のはロゴスの力によってこそ初めて可能になる。

「自我」が普遍妥当的な「価値」を措定し得るためにはしかし、もう一つ重要な条件がある。それは、「ロゴス」と「精神」という二つのものが共に十分に機能している時代でなければならない、ということである。ブロッホの解説によれば、「ロゴス」と「精神」の人間に対する影響力は時代によって程度の差があり、またこの両者のバランスも問題になる。「ロゴス」だけが一方的に優勢な時代もあるし、逆に「精神」が優位を占める時代もある。両者がバランスを保って互いにその影響力を十分に発揮できる時代

もあれば、両者共に振わず、「ロゴス」も「精神」も退潮的な時代がある。もちろん両者が相俟ってバランスよく支配力を及ぼす時代が理想的な良き時代である。過去のそういう時代の例を挙げれば「古代の最盛期と中世の最盛期」⁴⁵⁾がそれであった。本来ならば、「すべての人間の出来事は、 $\dot{\text{ロ}}\dot{\text{ゴ}}\dot{\text{ス}}$ と $\dot{\text{精}}\dot{\text{神}}$ との間に……固定されて繋ぎ止められて」⁴⁶⁾いなければならない。しかしハンナの生きた時代は違う。それは、「この時代の人々は、ほんとうに精神やロゴスと関係を断ってしまったのだろうか」⁴⁷⁾という時代である。この時代の人々は、科学的な意識が強すぎて、「ロゴス」や「精神」は神秘的領域に追放されてしまっている。「ロゴス」も「精神」も共に萎縮してしまって、その本来の力を発揮できないでいる。ところが「自我」は、この両者の間に生かされているものであるから、両者の関係が最悪の時代には「自我」もまた閉塞状態にある。ハンナの「自律的自我」はだから、混沌とした分裂状態のなかで総体としての事象が見えないままに、「価値の措定」に苦悶している。1918年に設定されたこの時代は、言いかえれば「実証主義」の時代であり、多数の価値体系の併存する時代である。実証主義的観点からすれば、数学的証明によって裏づけられていない現実を認める訳にはいかない。認知されるのは実証的に確認された個別的で独立的な価値体系である。そこに存在する現実是从って、互いに関連性を持たない排他的な複数の現実である。人間を取りまく外的世界は、統一的な全体としてではなく、無限に多数の独立的価値体系の混在となる。「自律的自我」は、一体どのような基準にのっとって、この無限の多様性のなかから「価値としての現実」を措定するのかという問題が生じる。人がある一定の価値体系のなかに組み込まれた場合、その一つの領域だけが「価値としての現実」になる。その他の無数の価値体系とは無縁である。この場合にはだから「自我の拡大」はあり得ない。またある「自我」が、二つないしはそれ以上の価値体系に同時に所属することがあった場合、時として互いに矛盾する「価値措定」を行うこともある。この種の排他的な価値体系のなかで徹底

的に自己を追求して生きると究極的にはどうということになるのか。その実例を追跡したのが第三部全体の主人公ユグノーである。

ユグノーは、商人的価値体系に属する人物である。彼の至上の価値は、商人としての成功であって、それ以上の価値規範はない。彼のあらゆる行動は、たった一つの価値に基いていて、他のあらゆる拘束は受けない。ユグノーは、「形而上学的観点から排斥された人間」⁴⁸⁾である。最終的に彼は殺人を犯してしまうが、それは彼にとって必然的結果であった。共通の価値体系を持たない人間たちにとって、相互理解や人間としての共感はあり得ない。ある人の自我が他の人の自我と構造的に一致しない場合、互いに人間としての了解さえもが不可能になる。こういう自我がいくら多数集合しても、そこに出来上がるのは「みせかけだけの共同体」⁴⁹⁾である。そこには親和力も働かなければ所属感覚も生じない。この状況のこの段階に生きる人間を代表的に体現しているのがハンナである。

4. ハンナの挫折

「ハンナの物語」としては終りから2つ目の章である78章において、心理的に追い詰められたハンナの心象風景が描かれている。「それは、とても不安というようなものではなかった。それよりもむしろ、屋敷が寂しい一軒家であることに対する一種の神経過敏の状態であった。……それは家屋敷を取りまいて空虚な空間だった。死滅してしまった風景、多数の断片から新たに建て直されたような風景だった。それは、あまりにも空虚で死滅してしまっていたので、いわば空虚さの帯になってしまっていた。その帯がこの孤独な女をますます息苦しく締めつけずにはおかなかった。しかもこの帯が再び粉碎されるには、まったく力の行使以外に方法はなかった。すなわち破壊か、突破かあるいは侵入しかなかった。」⁵⁰⁾この文章の表現している荒涼としたハンナの心の風景は、そのままで彼女の世界像

の表現である。「空虚」であり「死滅して」いて、「多数の断片から新たに建て直されたような風景」というのは、ハンナを取りまく世界はもう宗教的にも社会的にも、その統一性が失なわれてしまっているという事実を表わしている。さらにまたこの章句の言わんとするところは、前章でも述べたように、全体としての相互の関連は失っているがなお部分的に機能しているいくつかの「価値体系」を、不本意ではあるが仕方なしに結び合わせてより包括的な体系を合成しようとする意図の表現である。また、「空虚さの帯」がハンナを「息苦しく締めつけ」というのは、身の廻りに確かなものや信ずるに足るものを全く持たない寄る辺なきうつろな人間の心の空虚さのイメージをシンボライズしたものである。ハンナはこの心の空虚さを、まだ時として「忘れる」という心の働きによって一時的に回避することに成功する。事態の根本的な解決のためにはしかし、「忘れる」という働きは真の有効性を持たない。このためにはもう、「力の行使以外に方法はなかった。すなわち破壊か、突破かあるいは侵入」する他はない。

ハンナの周囲には、部分的価値体系の範疇では把握し切れないものが存在している。現状では言葉で説明し難いけれども、その存在が厳然と肯定されるべきものがある。それは、ハンナの生きている水準よりはより高次の、いわば形而上学的洞察にその判定を委ねざるを得ないようなものである。いまこれを仮に「非合理的なもの」と名付けるとすれば、その支配力は否定し難いものとなり、ハンナの行動に影響する。「人は、自身の暗黙の行状の本質を成している非合理性については何も知らないし、自分がそこに身を晒している“下からの襲撃”についても何も知らない。⁵¹⁾」

隣の町の爆発の巻き添えで「バラの家」は窓ガラスが割れて、屋根が損傷を受ける。「闖入者」が入って来るかも知れないような事態になる。夫のハインリヒの帰郷以外にはさしたる事件の生じなかった「ハンナの物語」は、その最終章（85章の一部）において、次々に非日常的な出来事が起きる。ハンナ自身の行為がここでは「非合理的なもの」に動かされて、本

人にもその行為の意味さえ明らかではなくなってしまう。直接的に身の危険が迫って来ることになって、ハンナは初めて行動する。すなわち子供と自分の保護と安全性を求める。それは具体的には自分の家の台所へ移動することであった。台所は、「心地良く」、「こざっぱりとしていて、しかも暖かいにおいが漂っている。」⁵²⁾すべての使用人とハンナとその子供が台所に集る。ハンナはここでいったんは安堵する。しかし台所の暖かみは、現実には存在しない見せかけだけの偽りの安全性であることが判明する。なぜなら台所に居合わせた者がみなそれぞれに心の不安を抱いたままなのである。人々はただ偶然台所において「全体」を形成しただけである。それは単なる一時的な集合体であって、「共同体」を形成したわけではない。「みせかけだけの共同体」である。台所に集合した人間たちはみな一時的に「魔法をかけられた (Verzauberung)」⁵³⁾のであり、一種の催眠状態に陥っている。

ハンナはこういう状況のなかで、自分では統御できないような行為へと自分を駆り立てようとする「声」を聞く。そして「聖約の国」へと自分を導いて行ってくれる「指導者」を憧憬する。⁵⁴⁾それらはしかし、あくまでも心のなかの仮象の存在であり想像上の目標点であって、現実にはむなしい期待にすぎない。彼女を最終的に救い出すかに見えた闖入者は、生垣のむこうに消え、「暗闇のなかに消え去ってしまう。」⁵⁵⁾第三部の全体としてのロマーンは、希望に満ちた未来に向かっての呼びかけとともに、明るい展望のうちに終わっているのと対照的に、ハンナ・ヴェントリングをめぐるノヴェレは暗い暗示のなかに結末をむかえる。ハンナは、「価値の崩壊」という究極の位相のなかで、孤独の恐怖から逃がれ出ることなく、息を引き取る。ハンナは最後まで形而上学的な現実感覚を持つことができなかったのである。

- 注 1) Vgl. *Hermann Broch. Kommentierte Werkausgabe in 17 Bänden*, hrsg. v. Paul Michael Lützeler, Frankfurt/M. (Suhrkamp) 1974-1981 Bd.1 S.744.
- 2) Vgl. Ebd., S.742~748.
- 3) *Hermann Broch. Gesammelte Werke in 10 Bänden*, Zürich (Rhein) 1952~1961, Bd.2 S.404. 以下GW.2のように略記する。
- 4) GW2. S.495.
- 5) GW2. S.588.
- 6) GW2. S.652.
- 7) Vgl. Sigrid Schmid-Bortenschlager, *Dynamik und Stagnation. Hermann Brochs ästhetische Ordnung des politischen Chaos*. Stuttgart (Hans-Dieter Heinz) 1980, S.90f.
- 8) たとえば次のようなページに見られる。GW2. S.104, 105, 207, 317f, 516, 593, 595, 662.
- 9) Vgl. GW2. S.516, 593 u. 595.
- 10) S. S-Bortenschlager, a. a. O., S.91.
- 11) GW8. S.57.
- 12) GW10. S.329.
- 13) GW6. S.183.
- 14) GW10. S.192.
- 15) GW10. S.193.
- 16) GW2. S.389.
- 17) GW2. S.403.
- 18) GW6. S.196.
- 19) GW2. S.403.
- 20) GW2. S.412.
- 21) Vgl. GW2, S.415.
- 22) GW2. S.461.
- 23) GW2. S.462.
- 24) Ebd.
- 25) GW2. S.463.
- 26) Ebd.
- 27) Ebd.
- 28) GW2. S.590.
- 29) 拙稿『ヘルマン・ブロッホ“夢遊の人々”の「哲学的省察」について』(千葉敬愛経済大学研究論集, 第26号1984年)を参照されたい。
- 30) GW8. S.23.
- 31) GW10. S.319.

- 32) GW2. S.462.
- 33) GW2. S.327.
- 34) GW6. S.322.
- 35) GW2. S.571.
- 36) GW2. S.427.
- 37) GW2. S.678.
- 38) GW8. S.329.
- 39) たとえばフレーゼとメンゲスは、「自律的自我」という術語の解釈において、シュラントの論文を批判する。
Vgl. Wolfgang Freese, Karl Menges, *Broch-Forschung. Überlegungen zur Methode und Problematik eines literarischen Rezeptionsvorgangs*, München (Wilhelm Fink) 1977, S.32
ここで、シュラントはブロッホの論述を無批判に受け入れて、ブロッホの論証の破綻をそのままに放置していると批判されている。もともとブロッホは、哲学上の専門用語を使用する際、その語の本来の意味と自分独自の用法とを明確に区別しないで使用してしまうところに問題の発端がある（Vgl. Barbara E. Walther, *Hermann Broch. Autonomie- und Einsamkeitsproblematik*, Bonn (Bouvier) 1980, S.27f.）。「自律的自我」という用語もまた、ヴァルターによればその概念規定が曖昧である。
- 40) GW6. S.317.
- 41) Vgl. Kommentierte Werkausgabe, Bd.10/2 S.37.
- 42) GW10. S.276.
- 43) GW10. S.106.
- 44) GW2. S.598.
- 45) GW10. S.300.
- 46) GW10. S.299.
- 47) GW10. S.300.
- 48) GW2. S.665.
- 49) GW2. S.678.
- 50) GW2. S.613.
- 51) GW2. S.661.
- 52) GW2. S.640.
- 53) Verzauberungは後の長編小説『誘惑者』のテーマである。
- 54) Vgl. GW2. S.651 u. 699.
- 55) GW2. S.652.